

芥川龍之介は他の近代作家に比べ、知名度があり研究も活発におこなわれているということによって、芥川研究は一種独特な問題状況に陥っている。それまで「時代や社会に無関心の厭世家の芸術至上主義者」「暗い陰鬱な作家、人を寄せつけない天才作家」というイメージで理解されていた芥川の作家像は、1990年代以降、関口安義らを中心とする「ポジティブな作家として再発見」していく作業によって「社会や人生の諸問題に誠実にかかわった、闘う作家」として認識されるようになってきている。だが、「陰鬱な作家」という芥川神話を瓦解させるために「闘う作家」という芥川のイメージを対抗させる作業も、今日では芥川の作家イメージを別の方向から新たに塗り替えようとする再・神話化、作家像の固定化の段階に入っているといえる。この対極的な二つの芥川像は、どちらかが真の芥川の姿を捉えた実像ということではなく、ともに芥川の遺した記述の痕跡とその周辺資料から読みうる可能態としての作家の姿でしかありえない。本研究の狙いは、こうした二項対立的な芥川像の捉えられ方に対し、出版資本主義を背景に「書く」ことをあくまで職業として行った、「売文」する芥川龍之介の姿を描き出し、既存の芥川像のあり方に揺さぶりをかけることである。

本論文は3部から構成されており、第I部では芥川の作家イメージに関する問題を扱っている。第1章「芥川賞の中の芥川龍之介」では、芥川の作家イメージの生成・流通のされ方を「文学」の一大メディア・イベントである芥川龍之介賞に関する言説を対象として考察を行っている。本論では、今日でも一般的な共通理解とされる「芸術家」「短篇作家」といった芥川に付与された作家像が、芥川賞の創設された昭和初期の文学場においては新旧の作家の世代間闘争や、純文学を商品化しようとする菊池寛の思惑などによって利用される中でさらに強化され、今日の評価へと繋がっていることを論じている。第2章「停滞の構造」は、現在まで積み重ねられてきた芥川の作家論的研究への批判的省察である。吉田精一を鼻祖とする本格的な芥川研究は、まずは作家論として始められたが、作家論の季節が終わりを迎え、文学研究の主流が作品論の時代に移っても芥川研究には依然として放置されたままの問題が残存する。その一つが芥川における「停滞期」と呼ばれる時期の評価に関する問題である。この章では「停滞期」という評価が芥川文学を前期の歴史小説と後期の自伝的小説という分類によって生まれたものであることを明らかにし、そのことが芥川研究の陥穽となってきたことを指摘している。第3章「停滞する芥川龍之介」では、前章でとりあげた「停滞期」という評価の問題が、作品の読解に与える影響を「東洋の秋」を具体例に用いて例証している。この小説を同時代の言説空間に配置し直すことで「停滞期」という評価に拘束されない読みを提示し、また、本論文の主要テーマとなる「売文」という概念を浮かびあがらせている。

第Ⅱ部は「文学とカネ」という観点から芥川作品に表れた出版資本主義の様相に焦点を当てて論じている。日本近代文学における文学とカネに着眼した論究は、雑誌『文学』（2014年5月）での特集や『作家の原稿料』（浅井清／市古夏生・監修、八木書店、2015年2月）など、近年では徐々にその数を増やしてきているものの、これまでは山本芳明による一連の仕事以外に本格的なものはほぼなく、芥川に関するものも森本修「芥川と経済生活」（『国文学』1981年5月）が、芥川の小説やエッセイ、芥川夫人の手記などを頼りに芥川家の経済生活を探ることを試みているが、そこでは同時代における活字メディアの中で芥川の経済生活がどのように語られているかということと、そのような言説の中に芥川作品を再配置したとき、どのような「読み」が可能となるのかという問題意識が欠けていた。本論文では、第4章「出版制度下の芸術家」では「戯作三昧」、第5章「十円札と作家の威厳」では「十円札」、第6章「芥川龍之介をめぐる大正期の売文状況」では芥川生前の未発表作品「売文問答」を対象として、出版制度とそこに關わるカネの問題を軸に作品を捉え直すことで、芥川文学に「売文」というテーマが潜在していることを明らかにしている。芥川が作品の中に描いた出版資本主義の制度下に「書くこと」を強制される作家の姿の背景に、創作に介在するカネの問題をあえて表面化させることによって、経済問題とは無縁の「芸術家」として捉えられがちな作家のイメージは相対化されていく。従来、「芸術家」という評価を与えられ続けてきた芥川の作家像は、こうした作業を通じて「売文業者」としての一面をより鮮明なものとするようになり、作家像と作品への評価も変更を迫られることになる。

第Ⅲ部ではここまでの議論から導かれた「売文」という概念を手掛かりに、「売文」が主題的に扱われた作品を売文小説として個別の作品論を展開している。分析対象とされている作品は、第7章「戦略としての売文小説」における「葱」、第8章「売文小説とメタフィクション」における「奇遇」、第9章「広告する／し損ねる小説」における「文放古」であり、各章において作品と「売文」との関わり、そこに表れたメタフィクション性などが論じられている。

これらの考察を通じて、芥川が大正期にメタフィクション的な構造を備える小説を書きえたのは、彼が「売文」の現場に接し、そこで「書かされる」という感覚を強く意識したことが創作におけるメタレベルを顕在化させることに繋がったためと結論している。日本近代文学の中には今日的に見てメタフィクション的とされる小説が多数存在するが、「売文する芥川」によって書かれた売文小説の数々は昭和初期のモダニズムを背景とした太宰治や石川淳らのメタフィクション的表現に先立つものだったと評価できる。また、芥川龍之介という著名な作家が、売文小説のようにアウラのない作品を発表するという自体、権威化する「文学」に対する批評的な意味を持っているとも考えられる。「芸術」という文学場の価値観を基調に語られる芥川の人生の中に「売文」をみることは、芸術家として構築された芥川の作家性に亀裂をみいだすことである。今日において芥川が「文学」を象徴する存在なのだとすれば、その芥川像が揺らぐことは作家性という機構を中心に構築され

た「文学」という観念の立脚する土台の揺らぎへと連鎖していく。その意味で「売文する芥川」は、日本近代文学史における「文学」の存立そのものを問う自己言及構造なのであり、芥川龍之介論並びに日本近代文学におけるメタレベルとして、常に中心から外れ続けることで「文学」を刺激し続けるのである。